

JICA 教師海外研修 学習指導案・授業実践報告書

【実践者】

氏名	松井 市子	学校名	新潟県立津南中等教育学校
担当教科等	外国語（英語表現Ⅱ）	対象学年（人数）	5年（高校2年）（55名）
実践年月日もしくは期間（時数）	令和2年9月～11月（9時間）		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域：外国語（英語表現Ⅱ）		
2. 単元(活動)名：外国語授業におけるデータサイエンスを活用した地域探究学習		
3. 授業テーマ（タイトル）と単元目標 授業テーマ：「住み続けられるまちづくり Resilient citizens in Tsumari Region」 単元目標：大地の芸術祭 2030 を描き伝える 関連する学習指導要領上の目標：SDGs と ESD を組み込んだ、外国語新設定科目「論理・表現Ⅲ」における、社会に開かれたカリキュラムを意識した発信力の強化		
4. 単元の評価 規準	①知識及び技能	外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解し、コミュニケーションの目的、場面、状況に応じて論理の構成や展開に配慮し、情報や考えを適切に表現することができる
	②思考力、判断力、表現力等	地域に関連した具体的な課題を自ら設定し、コミュニケーション活動を通して得た情報や考えなどをデータサイエンスも活用して統合的に表現したり伝え合ったりすることができる
	③学びに向かう力、人間性等	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、情報の送受信者に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとすることができる
5. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	<p>【単元設定の理由】 地域で一つの高校が消えるかもしれない…自分たちに何ができるか、何を学ぶべきか、何を伝え残すべきか、津南中等生が関わり続け、3年ごとに開催される大地の芸術祭が未来永劫続くことを願って、高校生の視点で考え発信する単元を学校行事と絡ませて設定する。</p> <p>【単元の意義】 地域で8回目を迎える大地の芸術祭を前に、教育現場はコロナ禍で当たり前の日常を捉え直す大きな機会となったが、時を同じくして、学校の存続が問われるニュースが飛び込んだ。持続可能な教育や社会、市民の特質について、有効なデータを精査して考察し、英語力を活用した校外交流や課外活動を通して、思い描く未来図を英語力を活用して地域や海外に発信することは、地域振興や地域理解につながり、生涯を通して持続可能な生き方を追求することに資すると考える。</p> <p>【児童/生徒観】 地元と50キロ周辺地域からそれぞれ半分程度入学するが、近年定員割れが続いており、1万人規模の地元は過疎高齢化が急速に進行している。本校の生徒は、大学進学を目指して勉学に勤しむ生徒が多い。家庭からの期待も大きく、学校の教育方針に共感的な世帯が多い。</p> <p>【指導観】 英語をコミュニケーションツールの一つをして捉え、持続可能な社会を目指して生涯学び続ける地球市民としての資質や能力を国際交流を通して身に付けてもらいたい。</p>	

6. 単元計画 (全 9 時間)				
時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	持続可能な市民の特性	資料を通して「持続可能な市民」の特性について学ぶ	資料 1 を英文で読み、日本語に置き換えて解釈する。 資料 2 を日本に置き換えて捉え直す。 (SDGs169TARGETS アイコン日本版制作プロジェクト https://www.asahi.com/ads/sdgs169/ 参加)	1. ESD が示す 8 つの能力 2. SDGs17 の下位目標 169
2-3	防災と国連	資料を通して災害を自分事として捉え直し、自分にできることを考える	資料 3 の自然災害をテーマとした Lesson 5 (阪神淡路大震災), Lesson 11 (東日本大震災)、および資料 4, 5, 6 を見たり聞いたりして、学校行事である東北へのキャリア研修と絡めて減災教育を自分事として捉え直す機会とする。 資料 7 を通して、キャリア研修で訪問する自治体が震災後、どのように復興してきたのか、自身は起こりうる災害にどう備えるべきなのか、評価し考察する。 資料 8 国連関連教材を活用し、UN の枠組みと活動をこれまでの学習と関連付ける。	3. 『SDGs 英語長文』(三省堂) 4. はるかひまわり 5. JICA 教海研関連資料 6. 釜石東中学校の防災教育 7. “Sendai Framework for Disaster Risk Reduction 2015-2030” (UN, 2015) 8. UN75 Dialogue SDG ACTION ONE
4-6	記録文学から読み取る人の情動	課題図書を通して遺族の情動や取材に必要な特性について学ぶ	課題図書 9-11 を通して、異なる国籍の著者による東日本大震災の記録文学を比較し、遺族の情動に注目して文学を解釈し、クラスで共有する。また、キャリア研修に向けた取材構想を練る。 資料 12(http://www.thinktheearth.net/data/sdgs_bookguide2020.pdf) pp.10-14 を活用し、取材準備をする。	9. 『南三陸日記』三浦英之著 10. 『津波の霊たち』リチャード・ロイド・パリー著 11. The Guradian's Book Review of Ghosts of the Tsunami 12. 『SDGs アイデアブック』活用ガイド
7-8 本時	津南妻有学の発信	「持続可能な市民」として学習成果を特定の情報の受け手に発信する	自ら設定した地域に関連する課題について、想定した情報の受け手にこれまでの学習成果を発信する。 想定される発信ツールや場面： ツール：Edmodo, Tour Builder, Flipgrid, SDGs アイデアブック、 場面：各種コンテスト、校内外発表会	
9	鑑賞とまとめ	鑑賞とまとめ	他のグループの学習成果物を鑑賞する。 SDGs17 の下位目標 169 から学習成果に関連した項目を抽出し、日本に捉え直した目標を作成し、共有する。 ESD の 8 つの能力に照らし合わせて学習成果を評価する。	

資料 1 : https://www.unece.org/fileadmin/DAM/env/esd/13thMeetSC/Documents/Presentations/ESDG_learning_objectives_EN_long_version.pdf

資料 4 : <https://haruka-project.jimdofree.com/%E3%83%97%E3%83%AD%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%BC%E3%83%AB/>

資料 6 : <http://kousin242.sakura.ne.jp/macchin/bbb/%e9%9c%87%e7%81%bd%e9%81%bf%e9%9b%a3%e3%81%a8%e5%e9%ef%e6%85%8b/%e9%87%9c%e7%9f%b3%e5%b8%82%e7%ab%8b%e9%87%9c%e7%9f%b3%e6%8d%00-2/>

資料 7 : https://www.preventionweb.net/files/43291_sendaiframeworkfordrren.pdf

資料 8 : UN75 Dialogue https://www.un.org/sites/un2.un.org/files/un75_toolkit.pdf,

SDG ACTION ZONE <https://sdgactionzone.org/home-2/>

資料 10 : <https://www.lrb.co.uk/the-paper/v36/n03/richard-lloyd-parry/ghosts-of-the-tsunami>

資料 11 : <https://www.theguardian.com/books/2017/aug/16/ghosts-of-tsunami-japan-disaster-richard-lloyd-parry-review>

7. 本時の展開 (7-8 時間目) ※県ふれあい事業を兼ねる zoom meeting			
本時のねらい: 複数の視点に立って物事を捉え、複数の情報を精査し、自らの設定した課題解決策を論理の構成や展開を工夫して創造的に表現する			
過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動 ・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)
導入 (10分)	これまでの活動を振り返る。(全体) 1. 総合的な学習の時間のねらいは? ー地域振興策を高校生の視点で表現する 2. 設定したグループ探究テーマの関連は? ービジネスプラン・コロナ・震災・その他 3. 外部連携先は? ー学校・地縁組織・NPO/NGO・学術/研究機関・自治体・企業 4. SDGs に絡めて英語で発信したツールは? ーSDGs アイデアブック・Tour Builder・ScreencastOmatic・Flipgrid 5. 学習成果を誰にどう還元する? ー下級生の学びに還元するために今できること・すべきこと 6. ESD の 8 つの能力とは? ーシステム思考・予測・規範・戦略・協働・批判的思考・自己認識・統合的思考 7. SDGs17 の TARGET はどう関わっている? ーSDGs11 住み続けられるまちづくりと生き方	総合的な学習のねらいと関連付けられるように導く。 学習成果の還元は具体的にイメージできるように言語化の手助けをする。	
展開 (85分)	収集した情報を元に『SDGs 英語長文』を参考にして下級生のためにデータを活用して英語長文テキストを作成するための構想を練り、県ふれあい事業で交流する留学生に伝え、フィードバックをもらう。(グループ) 『SDGs 英語長文 of Tsunan S.S - Quest for Echigo Tsumari Art Triennale 2030 -.』 (説明文・統計データ・詩・俳句・イラスト等の表現が考えられる)	新指導要領ではほとんどの支援を活用しなくてもねらいを達成することが掲げられているため、支援は極力行わない。	『SDGs 英語長文』 (三省堂)
まとめ (5分)	成果物を修正し、Edmodo に保存する		Edmodo

8. 評価規準に基づく本時の評価方法

以下の観点に基づき評価する

- ①知識及び技能：1) これまでの2回の交流から留学生の英語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解し、論理の構成や展開に配慮することができる → コミュニケーション障害が起こった場合支援する
- ②思考力、判断力、表現力：自ら設定した課題に関して、震災学習と関連付けながらデータや写真を精査して、様々な情報伝達ツールから選択して、情報の受け手に効果的に表現することができる → グループで取り組み、英語表現Ⅱのパフォーマンス点として10点満点評価（SDGsとの絡み、地域・研修先・取材に関連する写真や描写、データ）
- ③学びに向かう力、人間性：ESDにおけるSDG 11「住み続けられるまちづくりを」目指して、認知的・社会情動的・行動的に変容が見られる → 総合的な探究の時間の振り返りで自己評価する

9. 学習方法及び外部との連携

【学習方法】

現代文、コミュニケーション英語、総合的な探究の時間等、クロスカリキュラムで取り組み、学習成果物をICTを活用して外国人留学生と意見交換する。

【外部との連携】

- ・自治体職員から大地の芸術祭に関する歴史や意義について講演を聞く。
- ・県ふれあい事業を通して留学生と各国の地域課題について議論する。
- ・自治体と共同開催の大地の芸術祭に関わるバス巡検に参加し、地元サポーターからガイドを受ける。
- ・キャリア研修に向けた取材企画を作るにあたり、取材の心得や手法等を学ぶため、他校勤務のALT、起業家教育講師（バイオマスレジ南魚沼）、民間社員営業担当（リクルート）、旅行会社職員（共立観光）から講演を聞く。

（希望者）

- ・コロナ禍におけるオンライン交流プログラムに参加する。（ザンビアとのオンラインミーティング、模擬国連、ディベート大会、RESAS 発表会等）

10. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

中等教育学校という特性を生かして、6年間で地域探究「津南妻有学」を推し進め、地域理解から地域振興策へと有機的につながるように「総合的な学習の時間」を位置づけた。また、3年ごとに開催される「大地の芸術祭」を一つの地域活性起爆剤として官民の垣根を超えた協働を目指し、様々な団体と連携することを心掛けている。

【自己評価】

11. 苦勞した点	「学びに向かう力や人間性」をどう評価しようか悩んだ。外部から評価されるより内発的気づきに基づく省察を重視しようと考えた。英語力に関わる評価との関連をどの程度バランスをとるのがよいのか、年度末に実施する日本語の描写（振り返り）を分析して本実践に関わる学びの効果を検証しようと思う。授業者目線で本実践を振り返ると、英語の描写に関わる部分は授業者の支援なしで外国人と交流していたので、多くの生徒は「学びに向かう力」を十分発揮していたと感じる。他教科や学校行事など、様々な学習活動と連携させ、クロスカリキュラムで評価育成していきたい。
-----------	---

<p>12. 改善点</p>	<p>展開で Tour Builder を用いた発表に統一した。本活動後、様々なツールを用いた成果物作成の活動に展開したかったが、コロナ禍で様々な行事に制約がかかり、結果的にまとめの時間を十分に割くことができなかった。US や NZ など交流予定だった学校数も減少し、限定的な活動となってしまった。年度をまたぐことになるが、生徒の自主性が育成されるように工夫しながら実践したい。</p>
<p>13. 成果が出た点</p>	<p>教海研で得た知識やつながりを生かすことができた。ザンビアのオンライン交流は本研修参加者である須賀与恵教諭につないでもらい、数学教師や獣医、看護師を目指す生徒が参加し、このメンバーでチームを作って新潟県国際理解教育プレゼンテーションコンテストに参加し、審査員奨励賞を頂いた。キャリア形成にも有用だった。</p> <p>本研修顧問の佐藤真久先生から提供いただいた ESD の学習目標を活用して、地域に根差したオリジナル学習目標を作成できたことは、これを下級生と共有することで SDGs を中核として育成したい能力を全校で共有することにつながり、英語力も駆使して地域理解をより深めることにつながると思った。</p>
<p>14. 学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)</p>	<p>・『未来を変える目標 SDGs アイデアブック』</p> <p>昨年度『SDGs アイデアブック』を英語に翻訳するプロジェクトに参加した (Think the Earth SDGs for School 英語版翻訳プロジェクト)。Think the Earth のサイトを活用して地域課題に関する記事が作成できる (Think the Earth SDGs for School)。</p> <p>右図は生徒の成果物の一部である。写真やグラフ、イメージ図などを2枚まで挿入できる。関連する SDGs のロゴを選択すればきれいなレイアウトで記事が作成される。美的な視点にも注意を向け、成果物を誰にどのよう提示すると効果的なのかを考える良い機会になる。</p> <p>手順) 利用者登録 → 生徒とアカウントを共有 → 成果物を PDF で共有プラットフォーム (Edmodo) に提出</p> <p>・ Tour Builder</p> <p>Google が提供するサービスの一つで、マップ機能を持ったプレゼンツアーツールである。写真、図、動画などを挿入できる。地域探究テーマに絡めて日英バイリンガルで作成した。</p> <div data-bbox="1002 831 1453 1122" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1002 1126 1453 1417" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1002 1422 1453 1713" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1002 1718 1453 2060" data-label="Image"> </div>

右図は本時の展開であるグループが使用した一連のストーリーの一部である。地図と連動した提示になるため、ストーリーの流れに配慮する（論理の構成や展開を考える）力が育成できる。また、日英バイリンガルで表記することで、英語力が未発達日本語話者にも提示できたり、教師の支援なしでどのようなことを表現したかったのか確認したりすることもできる。

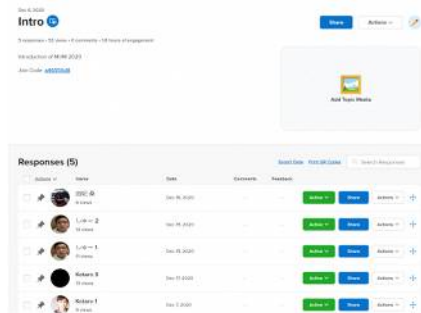
G アカウントがあれば誰とでも共有できる。本サービスは 2021 年 7 月に終了し、Google Earth に統合される。



・ Flipgrid

動画同士のやりとりができるツールである。字幕も自動で提示選択できるため初級英語力の生徒でも英語の母語話者とやり取りを楽しめるし、自身の英語の発音の癖も発見できる。

右図はモンゴル模擬国連に参加した生徒が日本人参加者に学びの総括や感想について投稿依頼したページである。時差や地理的制約を受けないのが良い点である。授業ではディベートやディスカッションに活用できる。

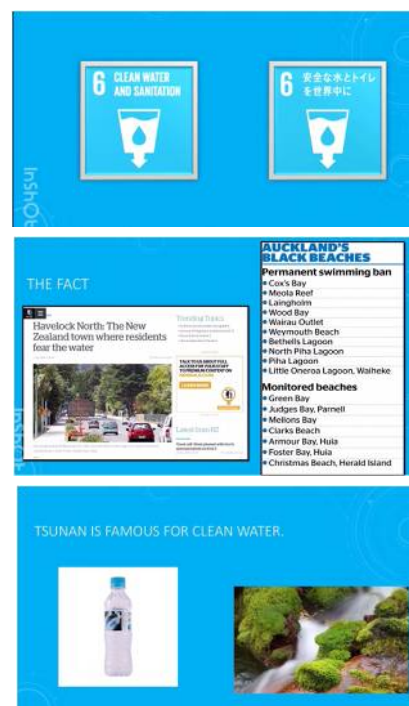



・ Edmodo と ScreencastOmatic

Edmodo は教育関係者専用のオンライン非同期型プラットフォームである。小テストを実施したり課題を提出させたりできる上、保護者も活動を見ることができる。機能を上げればきりががないが、主にメッセージのやり取りや資料等（動画、静止画、音声等含む）の共有目的で使用している。

右図は Edmodo に提出された動画で、ScreencastOmatic を使って、静止画に表情と声を乗せて海外研修の学びを下級生に伝える動画を作成したものの一部をスクリーンショットしたものである。

本校の生徒は 4 年次に全員で約 10 日間の海外研修に行く。昨年度、NZ に行き現地の高校で SDGs に関わる共同授業を開催した。NZ では水不足や水質汚染が深刻だという話を聞いた。津南は清水で有名である。この生徒はそれらに関連させて、現地でのどのような授業が展開さ



	<p>れたのか、自身で調べた内容も加えて資料を作成した。 また、現地へ行く前のアドバイスも加えて、海外研修の心構えを示した（コロナ禍で海外研修実施可否が分からない中でのアドバイスとなっている）。</p> <p>Edmodo では共同編集機能はないが、小グループを下位作成できるため、グループ内の生徒同士のやりとりを推進したい場合は効果的だと思う。</p>	
<p>15. 授業者による自由記述</p>	<p>ICT を効果的に活用することで、誰に向けてどのようにどのような内容を伝えればよいのか、様々なツールから選択する力が身に付くと考える。本実践は英語の授業における探究活動の一部で、年度末の総括や次年度の活動に向けた助走が含まれていない。来年度は生徒の論理的思考や判断力、表現力を英語力を駆使してさらに磨いていきたいと思う。様々な交流場面を設定して、生徒一人一人が「持続可能な生き方」がどのようなものなのか表現・実践できるよう支援していきたい。</p>	